

令和6年度 第2回岡崎市農業振興ビジョン推進委員会 会議録

1 開催日時

令和7年3月3日（月） 14:00～15:30

2 開催場所

岡崎市役所西庁舎 7階 702号室

3 出席者

(1) 会長

藤井芳一

(2) 職務代理人

羽根田正志

(3) 委員

大竹博久、倉橋勲、栗田なおみ、加藤智子、太田立身、笹竹恵子

(4) 事務局

経済振興部長：鈴木洋人

経済振興部農地整備課長：浅井隆

経済振興部中山間政策課課長：畔柳久司

経済振興部農務課長：小林哲夫

経済振興部農務課副課長：勝瀬仁巳

経済振興部農務課農政係：木村理恵、杉浦一子

4 傍聴者

なし

5 会議次第

議題

- 1 岡崎市有機農業実施計画～オーガニックシティおかざきプラン～アクションプラン（案）について
- 2 岡崎市農業振興ビジョン2030（農業振興計画・都市農業振興計画）における中間評価項目（市民アンケート等）（案）について

6 議事要旨

議題

- 1 岡崎市有機農業実施計画～オーガニックシティおかざきプラン～アクションプラン（案）について

岡崎市有機農業実施計画～オーガニックシティおかざきプラン～アクションプラン（案）について、事務局から説明。

【各委員の主な意見・質疑】

○藤井会長

根本としての質問となるが、このアクションプランの目標値を達成することで、岡崎市でどのような変化が起こると期待されるのか。

（事務局）元々国の施策として、有機農業実施計画を策定し、オーガニックビレッジ宣言をした後には、計画の実現に向け、計画に基づいた有機農業の産地づくりの取り組みを行うことになっている。目標を達成できた場合、少なくとも岡崎市は有機農業の産地と言って恥ずかしくないという状態となる。

○太田委員

アクションプランでの内容として、実施結果が書いてあるが、改善の検討について書かれていないように思われる。実施したことに対しての振り返りがあってこそ、次年度の取組につなげられるものである。反省すべきところをどう次のステップとして生かしていくかの記載がほしい。K G I の内容が記載されており、K P I の内容が書いてないように思われる。

（事務局）令和 10 年度までに何を行っていくかを書いているつもりではある。アクションプラン 1 つ 1 つの項目が K P I の位置づけで整理し、K G I としては最終ページの 20%、または実施計画で定める有機農業面積 100ha を設定させていただいている。ただ、1 年目ということで課題が書かれていない内容ではある。来年度からは、前年度振り返りとして課題を書いていくことも検討したい。

○太田委員

スマート農業で米の例があったが、野菜でも困っていることがあると思う。草刈りでも困っている人が多いと思う。その困っていることの切り口を教えてもらえると、有機栽培にチャレンジしようとする人も出てくると思う。具体的な内容がもう少しほしい。

○加藤委員

有機農業も適している野菜と適していない野菜があると思う。全部の野菜を有機にするということは難しい。昨年の夏は気候が不安定で、慣行栽培においても大変苦労した。まして、消毒等を使わない有機栽培は、大変だったと思われる。1 年で 20% も目標を達成しているのは、農家の方々の努力もあったと思う。継続してやっていくことも大変努力が必要で、大切なことである。

（事務局）野菜に関しては、まずは根菜類からが作りやすいと言われている。夏の葉物は難しい。野菜栽培テクニックとしては、有機農業塾等で指導が行われもするため、是非委員にも受講をしてほしい。

○加藤委員

種を撒いて、収穫をするまでに時間がかかる。作ったのは良いけれど、対価を得るまでの保証はあるのか？市や国の援助はあるのか？

（事務局）例えば、環境保全型農業直接支払交付金があり、額は大きくはないが、支援を実施している。

○加藤委員

このような情報を知らない人も多いと思う。

○藤井会長

情報を知らないと、チャレンジをしてみようとならないので、情報が広く行きわたると良い。また有機農業塾は、どのような人が申込できるのか。

(事務局) 交付金については、市ホームページに掲載したり、対象になりそうな人には声掛けをしたりもしている。有機農業塾は、当初農業経験3年以上の方を募集していたが、応募人数が少なかったため、家庭菜園の経験でも可とし、追加募集をしたところ、募集15名の枠に参加者17名となった。

○藤井会長

農業を3年行くと自分のやり方が落ち着いてきてしまう方もいると思う。応募対象として慣行農業を行っている人とあるが、慣行農業を実践した後だと、有機農業に踏み出しにくい人もいるのではないかな。家庭菜園等の規模を拡大していくことも良いかと思う。土壌生態系等を学び、生態系を意識した農業に関心がある学生もあり、慣行農業を行ってから有機農業だと遠回りとなるかもしれない。

(事務局) 有機農業塾の対象を検討する。

○加藤委員

最初から大きな面積を栽培しようとする大変である。少しの面積からやってみようという人がたくさん増えると良い。

○藤井会長

家庭菜園で有機栽培を行い、できた農産物を分ける人や少し販売したりする人が多くなれば、有機栽培の認識をもつ人が増えることになるため、岡崎市の有機農業を推進する背景として、家庭菜園等の人数を増やすことも良いのではないかな。

○笹竹委員

お店で野菜を買うことが当たり前だったが、最近野菜の価格が高騰しており、自分の庭で栽培を始めた。野菜の価格高騰の影響で、自分で栽培してみようという人が多くなっているかもしれないため、そういう人達の受け皿もあると良い。

○栗田委員

家庭菜園をすると安くなるという理由だと、経費はそれなりにかかるものなので、難しいかもしれない。趣味だと良いと思う。

(事務局) アクションプランの有機農業塾の項目において、少しでも販売する人の数の増加を目標としている。また、週に1度指導を受けられる有機市民農園の設置状況の増加も目標にしており、新たな担い手確保支援対策として、一つの組み立てとなっている。

○大竹委員

今後アンケートを実施するのもかもしれないが、どれくらい消費者が有機の野菜を求めているのか、有機の野菜がどれくらい高い価格でも購入したいのか等、実需者が求めている情報をもう少しつかめる方法があると良い。

(事務局) 産直施設でも有機の購入割合等の統計を取っていただけると大変参考

になる。

○加藤委員

野菜や米の価格が高騰していて、農業に対する見方が変わりつつある気がする。

（事務局）有機栽培を行う市内にんじん農家の話で印象的なものがあった。その方の農園では、化学肥料価格高騰等の影響を受けにくいため、にんじんの価格を変えずに年間販売しているそうで、慣行栽培のにんじんの価格の方が高くなっている時期があったそうである。有機で行えば資材高騰の波に乗らずに行くことができるかもしれない。

○藤井会長

アクションプランとして、数値を設定して目標を達成するということは、ある意味最低限の課題である。客観的な指標として、数値は大事である。それを踏まえて、実施した内容を振り返りつつ、次年度の施策を検討していくことが必要だと思われる。数値達成は最低限として、より良いアクションプランの達成内容となるために、委員皆さんのお力をいただきながら、進めることができればと考える。

原案どおり委員会として承認。（全委員承認）

2 岡崎市農業振興ビジョン 2030（農業振興計画・都市農業振興計画）における中間評価項目（市民アンケート等）（案）について

岡崎市農業振興ビジョン 2030（農業振興計画・都市農業振興計画）における中間評価項目（市民アンケート等）（案）について事務局から説明

【各委員の主な意見・質疑】

○加藤委員

アンケートは、どのような人を対象とするか。

○藤井会長

前回のアンケートの配布人数や回答率はどれくらいか。

（事務局）アンケートは、無作為に抽出した市民を対象とする。前回のアンケートは、2,000 人に配布し、約 39%の回収率であった。アンケートの回収率は、通常 30%程度であり、前回の回収率は、高めであった。

原案どおり委員会として承認。（全委員承認）

3 その他

令和 7 年度からの情報通信環境整備対策事業について、事務局から説明。

終了を宣言。